

自然の中で

# 野外教育情報

2022 第 15 号 ◆今号の特集◆ 「変わったこと、変わらないこと」

令和4年6月20日発行

公益財団法人 日本教育科学研究所

## 「変わるもの、変わらぬもの」

平田 裕一（至学館大学）

「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏の暑サニモマケヌ」で始まる詩をこれまでどれほど口ずさんだり、目にした経験を持たれているでしょう。小学生の頃、この詩を暗唱する宿題があり、一部内容（テクノボー）も理解しないまま暗記したことがあります。この詩は宮沢賢治のメモ帳の中に書き込まれた作品で、その題名は「十一月三日」です。東北を主な活動の場にした宮沢賢治が今から11年前の2011年3月11日、千年に一度と言われた東日本大地震を体験していたらどのように過ごし、行動したのでしょうか。詩の内容の通り、東西南北に出向き、災害後の「共助・公助」に当たられていたのだろうと想像する次第です。

日本の過去の災害の記述は、鴨長明による「方丈記」に見ることができます。その書き出しは、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖と、又かくのごとし」と記されています。同書は、長明が居住した京都の大火や人災、自然災害を経験する中で晩年の58歳、1212年に書き記された書物です。書き出しの文章は多くの出来事を経験する中で、この世の中を達観する思想として凝縮された一文になっているのだと思います。

現代では2020年1月に存在が明らかとなった「COVID-19」の世界的な感染拡大によって、この2年間、世界の人々の往来が閉ざされ、従来の経済的活動、交流活動の在り方に大きな影響を及ぼしています。しかし、その一方で新たな働き方やコミュニケーション・学習方法が模索されている期間でもあります。

「変わるもの、変わらぬもの」、どのような時間や対象を軸としてその変化を考えるかで物事の捉え方は異なります。地球が誕生して46億年。千年に一度の地殻変動は、地球にとって定期的な地殻変動の一つとして「変わらぬもの」かもしれません。その一方で、百年に一度の感染拡大は私たち日本人の平均寿命から考えると一生に一度経験するか否かの出来事であり、人生のどの年代でその出来事を経験するかによってその後の人生観や生き方、社会的なつながり方に大きな「変化」を与えるきっかけとなるのでしょうか。

● 平田 裕一（ひらたゆういち） 至学館大学 副学長 1957（昭和32）年生まれ、鳥取県出身、筑波大学大学院（修士）修了後、日本レクリエーション協会勤務。1989（平成元年）年に現在の大学の前身である中京女子大学に所属し、夏季・冬季と年間3科目の野外活動に関する講義・実習を担当している。



「景勝地の海岸にプラスチックゴミは必要ですか？」  
（於：兵庫県城崎温泉日和山海岸）

# 変えないために、変えたこと

## 🌲 ～信州へのコロナ移住を踏まえて～

木俣 知大

### 🌲 信州へのコロナ移住を決断

我が家は2021年4月に東京都から長野県に移住しました。

移住前も、東京とはいえ高尾山の麓に住んでおり、比較的身近に自然を感じられるエリアでしたが、SDGsの時代を迎える中で、子どもたちには“暮らし（社会）”や“生業（経済）”と一体となった自然（環境）を身近に感じさせておきたいという想いは強まる一方でした。

そんな中、コロナ禍において、諸外国では3密が避けにくい室内と、3密が起きない野外を区別した対応が取られている国もある一方で、日本では、室内と屋外を区別することなく同一視した対応が多い上に同調圧力が加わり、子どもの主体的な活動が行いにくい状況に窮屈さを感じました。

また、我が国ではSDGs時代と言われつつも、まだまだ従来の「縦割りを越えにくい組織体質」が多く、多くの枠組みで残っていますが、森林・農山村地域は、本来多面性・統合性を持っていることから、その価値・意義を引き出せるような取組も必要だと感じていました。

そんな中、コロナ禍でのオンライン会議等の普及に伴い、東京に住まなくても、これまでと同じく多様で全国的な業務ができるイメージが付いたことから、移住に踏み切りました。

### 🌲 信州だからこそ、育まれているもの

移住して間もなく1年が経ちますが、通学路だけを見ても、こちらでは雑木林も畑も野原も小川

もあることから、遊びながら伸び伸びと通学できます。さらに、春は植物の息吹、夏は河原で水遊び、秋は山の恵み、冬は雪遊びと、日常にある豊かな自然の中で、親子ともに生き生きと過ごせています。

また、私は移住に伴い、15年勤めた国土緑化推進機構を退職しましたが、引き続き協働先としてこれまでの仕事に関わらせて頂いていますが、信州は自然保育も森林サービス産業も活発な地域です。そのため、身近にあるグッドプラクティスに学びながら、事業の方向性の着想を得るとともに、新たな理論・方法論を編み出せています。さらに、事業内容に応じて複数の肩書きを持たせて頂くことで、分野やセクターを越えて新たなイノベーションを生み出せていると感じています。

### 🌲 求めるものを「変えない」ために

我が家の場合、コロナをきっかけに子どもの学びや仕事に求めるものを吟味し、求めるものの本質を変えないために地方に移住し、子育てや働く環境を変えました。特に、仕事では人生の様々な場面で森にふれあい、森の恵みを活かすことで心豊かな暮らしを育む「Forest Style」を呼びかけている中で、公私ともにその実践を行いながら、その価値を拡げる取り組みができるようになったことは、この上ない喜びです。

変化が激しく、先行きが見えない時代であるからこそ、本質を見失わないために、変えられることは臆することなく変え、引き続き、豊かな生き方・暮らし方・働き方を追い求めていきたいと思っています。

### ● 木俣 知大 [きまた ともひろ]

(一社) 東京学芸大 Eplayground 推進機構 研究員

(一社) 日本ウッドデザイン協会 事務局次長

(株) さとゆめ シニアコンサルタント ほか

東京農業大学大学院、(NPO) 森づくりフォーラム、(公社) 国土緑化推進機構等を経て、2021年4月に長野県に移住を機に、マルチワークを開始。森林・農山村地域の活性化のために、産官学民・異業種連携による林野庁関係プロジェクトの創出・実践に従事。  
E-mail : tomohiro\_kimata@yahoo.co.jp



# 野尻キャンプは還るところ



柳下 史織

公益財団法人東京YWCA（Young Women's Christian Association）は長野県野尻湖畔の半島1つ4万5千坪のキャンプ場で、年齢や発達段階に合わせてキャンプを実施しています。1931年に野尻湖畔にある“外人村”で第1回野尻キャンプを実施、東京YWCAに派遣されていたカナダ人女性を中心に寄付を集め1932年にキャンプ場を開設、女性と少女の心身育成とリーダーシップ養成の為に北米の組織キャンプが導入されました。日本の女性たちも北米で研修を積みリーダーとして活躍しました。現在も当時建設したホールにキャンパーは集い食卓を囲み、初代キャンプディレクターが滞在したキャビンに私は泊まります。

歴史を遡ると、戦時中は指令により7年間中止、1966年は群発地震発生で一部中止、そして2020年から2年間、感染症拡大防止のために初めて自主的に全プログラムを中止にしました。仲間とキャンプをすることで、どれだけエネルギーをもらっていたか、キャンプ場で「おかえり」と待っていてくれる仲間、非日常の空間がどれだけ日常の私たちを支えてくれていたかを実感します。



外国ルーツ青少年の日本語・学習支援も担当していますが、これは2020年5月からオンライン支援に切り替え、現在は対面と併用で実施しています。IT機器を使うことが少なかった世代の支援ボランティアも遠隔会議システムの使い方を学び、教材を共有したり書き込みをしたり、支援者たちにとっても大きな変化でした。この2年間で、学習支援には大学生ボランティアが一気に増えました。皆、人と接する機会が減少し、オンラ

インでできるボランティアを求めてきました。一方で、実践トレーニングが進まずキャンプリーダー育成には影響がでています。キャンプにユースリーダーは欠かせないので大きいので課題です。

この2年間、バーチャルキャンプやリーダーユニオンなどオンラインイベントを実施しました。追いかけてこの歌でキャンプソング、「野尻でやりたいことビンゴ」、ホワイトボードで絵しりとり、ミュート機能を活用したゲームなど、試行錯誤しながら新しい楽しみ方を探求してきました。コロナ禍1年目は、遠隔地にしながら「いつでも、どこでも、つながる」ことができる喜びを感じました。しかし、オンラインではできる事のパターンや結果が似たものになっていることに気がきます。オンラインで一瞬つながったとしても、本当のコミュニティは作れません。そっと手を差し伸べて目を合わせてくれる仲間、生活を共にすることで生まれる一体感、クロージングファイア、そういうキャンプ生活の醍醐味を代替できるものはありません。90年前、先達の眼に映っていたものは何か、改めて考える期間にもなりました。人と自然と共生することの大切さ有難さを伝え、子どもの体験活動を支援するミッションを受け継ぎ、キャンプ場は還る場所として存在し続けます。



## ● 柳下 史織【やぎした しおり】

公益財団法人東京YWCA 青少年育成事業部統括責任者

1974年新潟県出身。大学時代に東京YWCA野尻キャンプのボランティアリーダーを始め、グループカウンセラーやプログラムディレクターで関わる。私立中高に16年間勤務後、2014年より東京YWCA職員として野尻キャンプ場のキャンプディレクターを務める。その他、親子のアウトドア体験、外国ルーツ青少年の日本語・学習支援、リーダー養成を担当。

# 価値観の変化とキャンプ

変わったこと、変わらないこと



青木 達也

キャンプ民泊という施設を運営していくなかで、最近では“労働”に対する価値観の変化を感じる事が多くなりました。それは自分自身の経験も含め、お客様、スタッフとの会話のなかでも随所に感じられます。自分自身の働き方の変化で言いますと、今から6年ほど前、夫婦で都会に住みながら会社員として働く今の暮らしに少し違和感がありました。キャンプで焚き火を囲みながら妻と「将来どんな暮らしをしたいのか？」について話していくうちに、それならいっそ自然の多い場所で仕事をつくってみよう！ということになり、夫婦でできる仕事について考えました。そんな経緯から「自然のなかで遊ぶように暮らす」をテーマに「野あそび夫婦」というユニット名でキャンプの楽しさを広める活動を2018年から始めることに。そして2019年に、キャンプのハードルをもっと下げたいという思いから、レンタル、レクチャー付きのキャンプ体験施設「キャンプ民泊 NONIWA」をオープンしました。

「野あそび夫婦」の活動をはじめた頃は、2人ともまだ会社員でしたが、今は2人とも会社員を辞めてキャンプインストラクターとしての活動に専念できるようになりました。コロナによって世の中の働き方も大きく変わり、「自然のなかで遊ぶように暮らす」というテーマで活動してきたこの3年間を振り返ると、結果として今の時代にとってもフィットしているように思えます。そんなこともあってか、NONIWAに来てくださるお客様のなかには、今の働き方に迷っている人や、新しいことにチャレンジしてみたい人などが、相談しに来ることもよくあります。その会話のなかで特に感じるのは、“労働”に対する意識や価値観の変化です。この部分を上手く言葉では言い表せないのですが、例えば50年前



子どもが自分の力で火おこしに挑戦する火育体験

と今を比べると、労働の目的や役割、また労働そのものに対して求められることが少しずつ変わってきているのではないのでしょうか？

労働に対する意識が大きく変わっていくとすれば、産業革命以降に定着した「労働に対する余暇」という考え方も変わるということになります。それはつまり、これまで余暇の時間を楽しむ「レジャーとしてのキャンプ」でしたが、その役割が変わっていくということです。もしかしたら未来のキャンプは、週末のご褒美ではなく、もっと人々の暮らしに根づいたものになっているかもしれません。

そして労働に対する考え方の変化があるとなれば、学校教育に求められるものも変わってくるでしょう。与えられた仕事を効率良く作業的にできる人間ではなく、自ら問題を見つけ、その問題を他人に共感してもらい、解決し進歩していく。そんな能力を持った人間がこれからは必要なのかもしれません。そう考えると、自然体験を通じた教育はとても大切な気づきを与えてくれると私は思っております。

## ● 青木 達也【あおき たつや】 キャンプ民泊 NONIWA オーナー

1988年生まれ、大阪府出身。日本大学芸術学部放送学科を卒業後、アフリカ専門商社に入社。2018年から「野あそび夫婦」としてキャンプの楽しさを広める活動を開始。2019年に埼玉県ときがわ町にキャンプと民泊を組み合わせた施設「キャンプ民泊 NONIWA」をオープン。

# アドベンチャーの力



小澤 新也

幼少期の遊びの中で、いまだに記憶に残っている遊び、体験ってありますよね。大人になった今でもその記憶は鮮明に覚えており、なんとなくその体験を今でも探しているのではないかなと思います。私は今でもその体験、その時感じた気持ちを忘れることなく心に刻まれています。

小学生の頃の私は学校が終わるとすぐに、近くの川や山などに遊びにいきました。その当時の私の一番の遊びは、ちょっとした岩登りでした。想像するような岩登りではなく、岩肌の斜面を登るくらいの場所でしたが下には川が流れ、子どもながらに冒険心と恐怖心が入り混じった特別な場所でした。

そんな岩場の上部には大きな岩があり、その形がライオンの顔のようだったのでライオン岩と名づけました。ライオン岩に向かうチャレンジは、子どもながらにワクワク・ドキドキし、毎日足を運ぶようになりました。登り切ることができた時は、ものすごく嬉しかったのですが、私の記憶に残っていることは、ライオン岩に登り切ったことではなく、何度も挑戦しては失敗し、どうしたら登れるかなど友達同士で悩んだこと、登るために助け合ってきたことを鮮明に覚えています。その時に感じた友達の存在、優しさ、自分の中で芽生えたチャレンジすることの大切さなどの気持ちが今の自分に繋がっています。

私にとってのアドベンチャーの原点はライオン岩です。その原点の体験が今の仕事に繋がっています。私はアドベンチャーをベースとした体験の場を提供する仕事をしています。私たちが考えるアドベンチャーは、「私たちの日常に、自然に気づき学べる環境をつくる」です。日常の中でアドベンチャーをすることで、ワクワク・



ドキドキし様々な感情が生まれ、体験を通じて信頼関係が生まれ、自分の中の本能が揺さぶられることにつながるのではないかと思います。また、同じ体験をした人同士ではコミュニケーションが活性され、これまで知らなかった自分や相手に会う瞬間に気づくことができます。家族での体験では子どもが危ないことを乗り越える瞬間だったり、親がチャレンジしている姿だったりなど普段の生活では見ることができない、違った一面が見られるのも、このような場でしか味わえない体験なのかなと思います。チャレンジをすること、新しい自分に気づくこと、暖かく見守れることこそ、アドベンチャーが持っている不思議な力であり、何者にも代えられない大切な体験になるのではないかと思います。

世の中の環境が変化していく中で、仕事のやり方も、昭和～平成～令和と、大きく変わってきています。それは子どもたちの遊びも一緒に場所や環境は、大きな変化があったと感じています。外で遊ぶこと自体が少なくなり自分や他者との関わりが難しくなっています。私が子ども時代に感じた気持ち、本能を揺さぶる体験を、アドベンチャーという手段を通して大切に届けていきたいと思っています。

● 小澤 新也 [おざわ しんや]

株式会社プロジェクトアドベンチャージャパン

1975年山梨県生まれ。学生時代に野外活動に出会い感銘を受ける。その後、野外活動、自然体験活動、カヌーインストラクターを経て、現職に就く。アドベンチャーな体験ができる場作りに取り組んでいる。

# 自然からの贈り物

## ▲「変わったこと 変わらないこと」

### 土器 弥生

春先、友人と子ども達を連れて海辺に行くと、満潮時には海に繋がる川に拾ってきた木材で橋を造っていました。その川には取り残された大きな魚の死骸もあり、棒切れで引き寄せては観察していました。幼児や小学校低学年の子ども達は、誰も何も教えなくても好きなように自然からの贈り物を楽しんでいました。

また、庭に小さな畑があり、わが子と色々な種類の植物を育てています。まだ文字も読めない頃から毎日熱心に図鑑を熟読しては、この野菜はいつ収穫してよいかと心待ちにしていました。他に生き物も飼育し、育てることの責任感や生き物に対する優しい心を育めたらとの想いです。

現在、自然を自分らしく楽しむ中で気づく、「変わったこと」は自然と人との距離感です。

九州各地へキャンプに出かけるとどの季節も利用者は多くなり、誰もが「個々に」自然に居ることの心地よさを感じ、そこで出逢える瞬間を楽しんでいる様です。大自然を駆け巡る子どもを家族に任せテント設営を一人で進める中、声をかけてきたグループがいました。

「初めてなのでテントをどうやって立てるのかわからない」とのことで協力すると、その方から自分で育てた特別に甘いトウモロコシを分けていただきました。コロナ渦、キャンプ等の野外でも人との距離をおいて活動してきたので、思いもよらぬ出逢いで、「自然と、人と、関わる」という本来のキャンプの面白さを思い出した瞬間でした。

最近、子ども達が徐々に成長し自分の時間が少しもてるようになってきた仲間同士で登山部ができたことが楽しみの一つです。登山を最近始めた仲間は経験を重ねつつその良さを感じ、山での楽しいひと時に語り合い気づきがあり、よりお互いの絆が深まってきたように感じます。



その中で、皆わが子に色々な経験をしてほしいとの想いは同じでした。

ここ数年間はわが子と共に色々な体験活動を実践する中で、わが子において体験活動の与える影響を実感しています。例えば、キャンプでいつもと違う時間を過ごした結果、顕著に表れたのは言葉の発達で、初めての発言や体験したことを長い文章で表現する等、様々な体験が脳に刺激を与え記憶を形成していることがわかりました。文字の学習を始めると自ら練習に励み、漢字への興味も示し、それが知っている生き物や季節、行動を表現する漢字でもあることから、体験と全てが繋がっていると感じました。

小さな子ども達の異年齢交流においても、お互いに刺激を受け、学びあうことが伺われます。まだ色々と「できない」ことが多い分、「できた」時の達成感が大きくも感じるように感じます。それが、本人の感動であり親や指導者の感動でもあり、気づきとなるのではないのでしょうか。

「変わらないこと」は自然体験活動のもたらす素晴らしい影響であり、現在のような環境の中でも実行できる事があることです。今まさに自然というステージを見つめ直す良い機会であると感じています。

#### ● 土器 弥生【どきやよい】

1980年生まれ、福岡県在住。大学卒業後、沖縄県に移住。水泳・海洋体験指導、小学校臨時教諭、国立沖縄青少年交流の家で海上安全監視業務や事業補佐を経験し、企画指導担当及びボランティアコーディネーターとして勤務した。現在、幼児の子育て中。

# ああ無常



## 岡田 成弘

キーンと冷えた冬の日、富士山が綺麗に見えます。少しずつ寒さが緩むと、晴れた暖かい日には空気が霞むようになり、富士山がくっきり見えなくなります。先日、霞んだ富士山を見て「もうすぐ春なんだな」と思いました。このように私は、雪を被った山の見え方で、春の訪れ、季節の移り変わりを感じます。それは毎年変わりません。ですが、「毎年変わらないなあ」と考えていると、ふと、平家物語の冒頭の一句が思い出されました。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」

祇園精舎の鐘の音を聞くと、諸行無常、つまりこの世の全てのものは絶えず変化し続けているものだという響きがある、ということです。

新型コロナウイルス感染症拡大によって大きく変わったことの一つは、「気軽に集えなくなった」ことでしょう。大勢でのキャンプや実習、楽しい打ち上げ、カンファレンスや研修会等、人が集うことが気軽にはできなかった2年間でした。それがストレスになっていた人もいたでしょう。私もその一人でした。色んなことが思い通りにならず、ずーっともやもやしています。

しかし、野外での実践とはそもそもそういうものだったはず。天候や気象条件、フィールド、参加者や班の状態など、野外では思い通りにならないことばかりです。ですが、我々野外指導者は、それらに臨機応変に対応してきましたし、それが楽しいとさえ思っていたはず。それが、日常生活ではなかなか楽しめていなかったことに、春の空気に霞んだ富士山を見て、ふと気づきました。

「無常」という仏教用語は、この世の全てのことは、生滅流転し、常に同じものは無い、変化し続けるという、という意味を持っています。ですが、人間の生き方はどうでしょう。変わらないことの方が、安心して過ごせる人も多いと



毎週変わる富士山の顔（初秋の通勤路から）

思います。環境や状況が大きく変わってしまうと（そしてそれが思い通りにいかないと）、様々なストレスを感じる人も多いでしょう。私も、以前よりそのようなことが増えてきたような気がします。若い頃は変化を楽しんでいたのに、いつの間にか変化のない思い通りの毎日に安心している自分に気づきました。ああ、自分も変わったのだ、と。そして、これからも変わり続けるのでしょうか（多分、変わらない部分もあるのでしょうか）。

今の生活や環境、そして価値観も、いつかは変わります。変わることへの不安も変わらないことへの安心感も、確かにあります。でも、世の中は無常、常に同じものは無いのです。変わらないことと言えば、この世は常に変わり続ける（無常）ということなのです。野外活動の中で例えるなら、止まない雨はない、といったところでしょうか。きっと、変化を楽しむ心が大事、なのだと思います。毎日「変わった」表情を見せる富士山に、そう教えられたような気がします。

### ● 岡田 成弘【おかだ まさひろ】

東海大学 体育学部 生涯スポーツ学科

1983年生。兵庫県出身。高校生・大学生時代にラボ・パーティーで組織キャンプの魅力を知り、筑波大学大学院に進学して野外教育を専攻。2011年から9年間、仙台大学体育学部で野外教育を教える。2020年より現職。日本野外教育学会理事。

# キャンプの変わらぬ価値

変わったこと、変わらないこと



## John Jorgenson

キャンプでは毎年、仮ごしらえの実験室や体育館、生活体験の場などが作られ、さまざまな実験と体験が繰り返されます。優れた指導者は、決まった形を手取り足取り教えたりはせず、子どもたち一人ひとりに合わせてカスタマイズした体験を提供します。子どもたちが自分で決断し、自分の物語を書くことができるような状況を作り出すのです。そうすることで子どもたちは新しいスキルを身に付け、生きる力（レジリエンス）を獲得するのです。

キャンプでは、世の中の圧力や影響から離れた場所、「オアシス」を作ります。これはキャンプにとって重要なポイントです。日常生活から離れることで、子どもたちは視野が広がり、大切なことが明確になり、結果をはっきりと認識できるようになります。私たちが求めるのは、子どもたちがキャンプの中で立派なキャンパーになることではありません。子どもたちが立派な市民（Citizen）となるために、キャンプを通じてさまざまな体験をし、それによって生きるための、人生に前向きな変化を生み出すツールを身に付けてほしいのです。このツールは一生ものです。

このとき、やはり直接の交流は欠かせません。ウェビナーでキャンプファイヤーのやり方を教えることはできます。しかし、それは自然の中で一緒にキャンプファイヤーをすることに取って代わるものではありません。子どもたちにリーダーシップ教習ビデオを見せることはできますが、それは森の中で子どもたちに模範を示す若いリーダーの代わりにはなりません。テクノロジーは重要です。しかし、それはツールのひとつに過ぎないのです。

子どもたちにとっては、自分がどれだけ気にかけてもらっているかということがとても重要です。そのことが確認できるまでは、子どもたちは私たちが伝えたいことにあまり関心をもちません。ですから、私たちのコアバリューであるリーダーシップとつながりは、常に私たちの行動を通して示されなければなりません。これ

は、テクノロジーだけではカバーできないのです。

このように考えると、基本的な部分では、これまでと同じようなキャンプが続いていくのではない

でしょうか。これからもキャンプは、子どもたちが自分自身の人生の選択をしていくためのツールを与える場であり続けると考えています。

『Consciously Digital』の著者、アナスタシア・デディユキナ博士は、心身のウェルネスに寄与する新たなテクノロジーが注目されていることを紹介しています。しかし同時に、すでに効果的なメカニズムが存在することも指摘しています。それは自然の中での活動や人との交流に没頭することです。自然の中で活動することで、自己認識、勇気、レジリエンス、友情、優しさ、フェアプレー精神、創造性などが得られます。これらはまさにキャンプ体験の核心となるものです。この事実は今も昔も変わりませんし、これからも変わることはないでしょう。

キャンプでは、さまざまな社会課題に対応する取り組みがなされていますが、それは「社会を映す鏡」というより、「社会に反映させるべきよき実践の場」と考える方がよいのかもしれません。キャンプでの体験・実験を広く社会に反映させることができれば、社会はより思いやりに満ちたよい場所になるでしょう。そう考えれば、子どもたちにどのような体験が必要かは自ら見えてくるでしょうし、キャンプを通じて社会に大きな変化をもたらすこともできるのではないのでしょうか。

### ● John Jorgenson

50年以上にわたってキャンプに携わり、オンタリオ・キャンプ協会、カナダ・キャンプ協会、国際キャンプ連盟の会長を歴任した。2023年スペイン・タラゴナで開催される国際キャンプ会議-ICC2023-の大会委員長も務める。日本にもキャンプを通じて多くの友人がおり、ジョギーの愛称で親しまれている。



John Jorgenson



# アウトドアゲーム指導法講習会 国立曽爾青少年自然の家との共催で 「1泊2日コース」

## 開催概要

今回は、通常の出張講習会の内容に加えてコロナ禍での自然体験活動という点も踏まえて展開しました。野外教育に関係する団体職員からボランティアの学生など様々な方が参加しました。

日程：2021年11月13日（土）～14日（日）  
会場：国立曽爾青少年自然の家（奈良県宇陀郡曽爾村）

講師：中丸信吾（研究所レギュラー講師）  
加々美貴代（やまぼうし自然学校）  
鎌田晴美（まなび創造アカデミー）

※アウトドアゲーム指導法講習会 出張講習会  
通常は2泊3日での講習会を実施していますが、当研究所のレギュラー講師が出張指導し、1泊2日に凝縮した講習会。ゲームの体験だけでなく、ゲームの創作まで展開します。

## 活動内容

11月13日（1日目）

開講式の後、早速、フィールドに移動して活動開始。アイスブレイクの後、各講師による課題解決型ゲーム「バケツボール」「ヘリウムフープ」「目・口・体」を体験しました。いずれのゲームも課題解決のゲーム性を保ちながら、ソーシャルディスタンスに配慮した工夫（物を使ってお互いの距離を一定に保つ・物を介して間接的に相手に触れる）を加えて実施しました。

課題解決型ゲームが終わると、自然学習型→自然体験型とゲームを展開しました。

自然学習型ゲームは加々美講師による「つながり探し」。ウォールポケットを使って、ひとつのポケットにひとつ自然物を入れ、隣り合う物の特徴や性質の共通点を見つけて、次へ次へとつながりを結んでいきました。拾い集めた物も違えば、つながり方も色々で各チームの違いが楽しさとなって表れました。

自然体験型ゲームは鎌田講師による「ハンティングゲーム」。今回は動物カードをゲットしたら、猟犬は鳴かずにジャンプやダンスで他の猟犬との違いをつけてハンターに見つけてもらいました。走る+ジャンプ&ダンスアピールで、ハードさ倍増！でした。

夕方には中丸講師による「子どもたちの体験活動」に関する講義。自然体験不足による心身の変化について、直接体験・間接体験・疑似体

験の違いを含めて説明。直接体験の重要性について、話を聞きながら考える時間となりました。

夕食後のナイトゲームは中丸講師による「光の虫めがねでナイト俳句」。今回は創造イメージ型ゲームとして行いました。

光の虫めがねで真っ暗なフィールドを照らして思うままに歩く。暗闇に浮かぶ小さな光たちと鹿の鳴き声が合わさり幻想的な闇夜がありました。五感が刺激された後に一句。

それぞれのゲームを体験した後はゲーム創作へ。中丸講師がゲーム創作のポイントを解説し、ゲームづくりが始まりました。



ソーシャルディスタンスに配慮したアクティビティ

11月14日（2日目）

朝食後、創作ゲームの仕上げです。アイデアを形にするために、シミュレーション・検討・修正を繰り返して完成。ゲーム発表では3つの新たなゲームが生み出されました。

発表を終えた後は参加者と講師、今回のゲーム体験とゲーム創作について振り返りを行いました。

## With コロナの観点で考える

コロナ禍でも、適切な感染対策とプログラムの工夫をすることで、自然体験は実施できます。IORE Sheetは対象やフィールドに合わせて、ゲームのアレンジが可能です。柔軟かつシンプルなアイデアが鍵となるでしょう。

## 最後に

講習会の機会をいただきました国立曽爾青少年自然の家の皆様、ありがとうございました。この場を借りて心から感謝申し上げます。

● 鎌田 晴美 [かまた はるみ]

まなび創造アカデミー 理事

早稲田大学 教育学部 非常勤講師

(公財) 日本教育科学研究所野外教育情報編集委員



# 3年ぶりに開催! アウトドアゲーム指導法講習会



## 【開催概要】

2021年10月に、アウトドアゲーム指導法講習会を3年ぶりに開催しました。2019年・2020年は台風とコロナ禍により中止…、待ちに待った開催となりました。

アウトドアゲームとは、自然豊かなフィールドで遊ぶことによって、“楽しい”、“気持ちよい”、“美しい”など、自然に親しみを感じる気持ちを生み出す活動で、自然体験活動とも呼ばれる活動のひとつです。本講習会ではIORE Sheet (アイオレシート) という、イラストを使ったオリジナルの教材をベースにアウトドアゲームを体験するだけでなく、アウトドアゲームを自身で創作することで自然の中で遊ぶ楽しさを深く学ぶことを目的としています。

今回は、新型コロナ禍での自然体験活動という点を踏まえ、活動内容をアレンジして展開しました。通常は2泊3日での講習会を実施していますが、1泊2日に凝縮して実施しました。

日程：2021年10月30日（土）～31日（日）  
会場：厚木市七沢自然ふれあいセンター（神奈川県）

指導：平野吉直（信州大学）、野口和行（慶應義塾大学）、鶴川高司（有限会社 掌）、中丸信吾（日本女子体育大学）、瀧 直也（信州大学）、鎌田晴美（まなび創造アカデミー）、土井浩信（当研究所理事）、学生補助員3名（多胡泉穂、中野未久、島谷葉那）

参加：28名（野外教育に関係する団体職員、教員、保育士、ボランティアの学生など）



## 【活動内容】

1日目：10月30日（土）

開講式の後、早速、フィールドに移動して活動開始。瀧講師と鎌田講師によるアイスブレイクで一気に和やかな雰囲気になりました。

昼食の後は小グループに分かれて課題解決型ゲームです。いずれのゲームもソーシャルディスタンスに配慮した内容で実施しました。

### ○課題解決型ゲーム

#### ●バケツボール（瀧講師）

グループで大きなシートの端だけを持って広げ、その上に乗せたボールを協力して高く飛ばしたり、バケツの中にボールを入れたりします。

#### ●森の中の危険物処理班（鎌田講師）

限られた道具を駆使して、危険なエリアにいる動物たち（ぬいぐるみ）を救出して安全なエリアに移動させます。



危険物処理

#### ●ビッグ・キーパンチ（中丸・野口講師）

スタートからナンバーエリアにある1～30のカードを番号順にタッチしてゴールに戻ってくるまでのタイムに挑戦します。通常のナンバーエリアよりもスペースを広くして、ソーシャルディスタンスに配慮して行いました。

#### ●ロング・パイプライン（鶴川・平野講師）

手に持ったパイプの上でボールを転がして、



ロングパイプライン

グループで協力して制限時間内にゴールまで運びます。通常よりも長いパイプを使って、ソーシャルディスタンスに配慮して行いました。

課題解決型ゲームの後は、自然体験型ゲーム、自然学習型ゲーム、創造イメージ型ゲームの3つのタイプのゲームを体験しました。

#### ○自然体験型ゲーム

##### ●森の気持ち探し（平野・中丸講師）

気持ちカードに書かれた「気持ち」にぴったり合う自然物を持ってきます。今回は、気持ちカードをチームで相談して作って、2チームでカードを交換して探しました。

#### ○自然学習型ゲーム

##### ●森のつながり探し（野口・瀧講師）

自然物の形や色、匂い、手触りなどをよく観察して、相互につながり（共通性）のある自然物を集めて順番につなげていきます。ただし、一度使ったつながりは二度使うことができません。どれだけたくさんつなげることができるでしょうか。最後と最初の自然物とつなげて円を作ることもできます。



つながり探し

#### ○創造イメージ型ゲーム

##### ●森のレストラン（鶴川・鎌田講師）

コックになりきって森のレストランの開店です。次のお客さんの注文はなんでしょう。お子様ランチ、ミックスフライ定食、アジの干物定食、フルーツパフェ、フルーツあんみつ…。もちろん使うのは自然物だけ。おいしそうなお料理がたくさんできました。

それぞれのゲームを体験して夕食をとった後は、いよいよゲーム創作。中丸講師がゲーム創作のポイントを解説し、創作してみたいゲームタイプで6つのグループに分かれてゲームづくりが始まりました。アイデア出しからはじまり、



森のレストラン

自然物を手に取ってみたい、フィールドに出てみたい、試行錯誤が続きます…。

2日目：10月31日（日）

朝食後、創作ゲームの仕上げです。アイデアを形にするために、シミュレーションをして検討している様子です。タイムリミットまでに創作ゲームシートを完成させて無事に提出です。

ゲーム発表では、ゲームを創作したグループによる進行で、参加者も一緒に遊んで楽しい時間になりました。

課題解決型：「魔法のスティック」、「みんなで宅急便」

自然体験型：「森のしりとり」、「タワーオブリーフ」

自然学習型：「探して合わせてぴったんこ」

創造イメージ型：「森のデパート」

閉会式では、各講師から好評と感想を述べて、講習会は滞りなく終了しました。感染対策を講じての開催となりましたが、対面でのやり取りはたくさんの刺激があり、とても有意義な講習会となりました。

自然体験を止めるな！

新型コロナにより多くの体験活動の機会が失われていますが、このような状況でも適切な感染対策とプログラムの工夫をすれば自然体験を実施することができます。対象やフィールドに合わせてゲームをアレンジすることができるIORE Sheetは、コロナ禍でも活用することができます。

##### ●中丸 信吾 [なかまる しんご]

日本女子体育大学 講師

（公財）日本教育科学研究所自然体験活動推進委員、野外教育情報編集委員

# おかげさまで大贅沢!

変わったこと、変わらないこと



## 鎌田 晴美

ゲレンデにいるのは私たちだけ!

3月末、スキー場を丸ごとお借りして、2年ぶりに雪遊び企画を実施しました。子ども達から「スキー場を貸切りなんて、すごい!」「誰もいないよ!」「ワァ〜!叫んでも大丈夫だね!」と大興奮です。マスクを外して、走って滑って転がって、雪の上で遊び放題でした。

雪遊び企画は例年2月に実施しています。今年も準備をして、いざ!という段階で、延期、企画変更をせざるを得ない状況になり、フィールドを変えて企画を練り直しました。

この2年間、主催も学校プログラムも、何度となく企画、計画をしては、延期、中止という判断をしてきました。自然の中でさえ遊びにくくなり、友達と触れ合いながら遊ぶ機会が極端に減り、子ども達のココロとカラダの健康が心配されています。そして、私たちのココロもフトコロ事情にも大きな打撃がありました。

今では多くの団体が企画実施に向けて、シフトチェンジをしています。出来ない理由を探す「〜だから、しない、〜だから出来ない、ではなく、出来る工夫をしています。

その一方で、運営を合理的に考えてマイナスを削る団体や会社もあります。今回、お借りしたスキー場がそうでした。3月半ば以降はスキー場にお客様がほとんど来ないから営業はしません!というわけです。様々な事情の上で判断されていることでしょう。そのおかげで、私たちはクローズしたスキー場をお借りして遊ぶことが出来ました。雪に対する価値が違うことによ

り実現した訳で、`おかげさま、です。

ゴンドラやリフトは止まっていますから、ゲレンデを自分の足で登っていきます。どこを歩いても怒られずに足跡をつけて歩くことができ、好きなところからソリに乗って滑ります。

スキー場の中腹まで登り、お弁当を食べ、ソリで滑ってきた子ども達は「最高〜!気持ちいい〜!」と笑顔いっぱい大声で叫んでいました。子ども達が自由に叫び、はしゃぎ回る姿が当たり前でなくなった今、大贅沢な経験だったと思います。

コロナは変異を重ねていますが、世界のコロナ対応は緩和の方向に向かっています。

しかし、ロシアによるウクライナ侵攻により、今まで当たり前だと思えていたことが、突然、当たり前ではなくなることもあると、再び知らされました。

変わりゆく世界の中で、考えて生きましょう。変わらないこと、変えたくないこと、変わっていかねばならないこと。

● 鎌田 晴美 [かまた はるみ]

まなび創造アカデミー 理事

早稲田大学 教育学部 非常勤講師

(公財) 日本教育科学研究所 野外教育情報編集委員